

## 村岡花子との最初の出会いは『王子と乞食』

村岡花子と私の“出会い”は、彼女の最初の翻訳作品『王子と乞食』でした。戦後まもなく、まだ本も少なく買えなかった当時、子どもたちに人気だった「カバヤ・キャラメル」の会社が、販売促進の一環として空箱を集めて送ると児童文学本を送ってくれたのです。私は兄弟みんなで集めた空箱で『王子と乞食』を手に入れました。王子と乞食が入れ替わるといふ作品の奇想天外なストーリーに惹かれ、作者（マーク・トウェイン）は知らなくても、なぜか翻訳者の名前がいつか頭の中に入っていたのです。

『赤毛のアン』の舞台プリンスエドワード島訪問を思いついたとき、私は最初の翻訳者・村岡花子の生地、山梨の文学館で彼女の足跡を紹介する展示会の現場を訪ねました。彼女が実際に翻訳に取り組んだ場は東京都大田区。現在「村岡花子文学館」があり、お孫さん二人が管理運営に当たっています（NHK朝ドラの原案はその一人・村岡恵理と出ていますね）。



村岡花子



グリーンゲイブルズ

以来、“Anne of the Green Gables”はこれまでも何人にもよって翻訳されてきています。直近では松本侑子が挙げられるでしょう。彼女は原作に引用されている文章の出典を詳細に調べ上げた。その注釈を読んでいくと、作者L・M・モンゴメリーがシェクスピア、バイロンを初め、ヨーロッパの歴史上の作家の作品や、キリスト教文化の原点・聖書から数え切れないほど引用をしているのがわかります。

それに100年前のカナダの生活描写は、自分たちシニア世代の半世紀あまり前の子ども時代をも懐かしく思い出させてくれます。

孤児院にいたアンは、いろんないきさつがあつたが、結果的にマッシュー、マリラ兄妹の家で育ててもらえるようになりました。学校にも通えるようになった。

登校の初日に起こった事件。クラスの男の子ギルバートから、彼女が最も気にしている赤毛を「ニンジン、ニンジン」とからかわれた。怒ったアンは、使っていた石板を彼の頭上に打ち下ろしたのです。



モンゴメリーの生家

石板といえば、終戦後3年目に私が入学した長野県の小学校の教室でも使っていました。すべてに物資が欠乏の時代。つぎのあたった衣服は当たり前。ノートは茶色がかったざら紙。教科書の一部さえも兄からの“おさがり”でした。昼食の弁当を持ってこられない同級生。それでも休み時間には黒板に相合傘の絵を描いて遊んでいたのが、テレビ番組の小学校の教室とも共通していて懐かしい感じです。

ギルバートは頭脳も性格もよい好男子でした。アンは反目は続きますが、最終章で仲直り。後に続く「アン・シリーズ」では、二人は結婚をし幸せな家庭を築いていきます。その出だしにこんな伏線を置いたたぐいまれな構想力！しかも「叩き割ったのは石板で、頭ではなかったが、真っ二つに割れてしまった」と、ユーモアのある表現も面白いですね。

## シニアこそ読もう！『赤毛のアン』

2008年、同書の出版100周年記念の年、私はプリンスエドワード島に飛びました。

実を言うと最初は少しだけ恥ずかしかった。「いい年をしたオジサン（お爺さんかな？）が、なんでわざわざ少女物語の舞台を訪ねるんだい？」。どこかで“悪友”の冷やかし声が聞こえてくるような気がしました。



“世界一美しい”プリンスエドワード島

心を決めもう一度作品を読み直してみると、若い女性ばかりでなく、男性も含めたすべての大人が読むべき本、また読み直してよい文学作品、との絶対の確信を抱くようになりました。NHKの番組では今をときめく脳科学者の茂木健一郎氏も「若い時、男の自分もアンのファンだった。でも恥ずかしかったのでトイレで読んでいた」とも言っていた。そんな有名人の言葉に気を強くして、私のアンへの思いは次第に深くなっていったのです。

人は年を重ねるにつれて夢を失いがちです。ましてシニア世代は身体だけでなく心まで枯れてしまう人も多い。年をとるほどにアンのような心のみずみずしさをたもちたい！NHK朝ドラの中で花子がときどき口にする言葉があります。

「パルピテーション」=Palpitation。英語のpalpitate（心臓の動悸がする）との動詞が名詞化されたものですが、ここでは「心がドキドキする」「胸がときめく」といった意味で使われているのでしょう。年をとっても心がときめくような人生は素敵です。アンを読んでいくと彼女の可愛いおしゃべりや、歯に衣着せぬ本質を突いた言葉に引き込まれていき、こちらの心まで若返っていくような気がします。

古典は何度読んでも新しい発見があります。シニアになって古典を読む、「シニアこそ読もう『赤毛のアン』」と訴えているところです。

**“Seniors, be ambitious!”（熟年よ、大志を抱け！）**

こうしたなか、その年の4月からNHK教育テレビ番組「3ヵ月トピック英会話『赤毛のアン』への旅——原書で親しむAnneの世界」を視聴するほか、都内で翻訳者の松本侑子講師が直接講義するセミナーにも出席しました。さらに6月初めには劇団四季が主宰するミュージカル「赤毛のアン」を、続いて物語の舞台の本場カナダでも同タイトルのミュージカルも鑑賞したのです。

心を決めもう一度作品を読み直してみ



アボンリー村のアン